（仮称）牧之原市ＩＣ北側土地区画整理事業に関する業務協定を締結

業務協定を締結した鈴木会長（写真中央）、竹林東京本店長（左）、杉本市長（右）

ＩＣ北側地区では、新たな拠点、にぎわいの場の創出に向けてまちづくりを進めていきます。
問い合わせ　新拠点整備室　横山　☎㉓3333

これまでの取り組み

東名高速道路相良牧之原ＩＣ北側地区の開発は、第２次牧之原市総合計画の重点プロジェクト「輝く高台開発プロジェクト」に位置付けられています。

平成29年２月、地権者などによって牧之原市ＩＣ北側土地区画整理準備組合（鈴木芳明会長）が設立され、魅力あるまちづくりを目指して検討を進めています。

準備組合では、民間事業者の力を活用した土地区画整理事業の推進を図るため、平成30年９月に、事業認可の取得や土地区画整理組合の設立に向けた業務などを行う「一括業務代行予定者」を公募し、大和ハウス工業株式会社を選定しました。

業務協定を締結

準備組合と大和ハウス工業、市はまちづくりや土地利用方針の検討を進め、１月31日、市役所榛原庁舎において、三者による「（仮称）牧之原市ＩＣ北側土地区画整理事業に関する業務協定」を締結しました。

業務協定は、東名相良牧之原ＩＣ北側地区（22・6㌶）において、（仮称）牧之原市ＩＣ北側土地区画整理事業に関する業務協定」を締結しました。

業務協定は、東名相良牧之原ＩＣ北側土地区画整理事業を施行するため、次のことを定めています。▼準備組合が組合の設立に向けた業務を大和ハウス工業に委託すること▼大和ハウス工業が事業推進の役割を担うこと▼市は準備組合が組合を円滑に設立できるよう援助すること―など。

締結式では、準備組合の鈴木会長、大和ハウス工業の竹林桂太朗執行役員東京本店長、杉本市長が協定書に調印しました。準備組合の鈴木会長は「大和ハウス工業、市と共に、三位一体で取り組みたい」と抱負を述べ、大和ハウス工業の竹林東京本店長は「牧之原台地に人々が集まる産業の拠点、商業の拠点、人々が笑顔で暮らせる場をつくる」と決意を述べました。杉本市長は「組合の設立に向けて全力で準備組合を支援し、三者が一致団結して、ワンチームでまちづくりに取り組んでいく」と話しました。

業務協定書に調印する鈴木会長

新たな拠点に向けて

ＩＣ北側地区では、商業施設や産業施設、住宅地の整備など、複合的な開発を目指し、具体的な検討を進めていくこととしています。

協定の締結により事業は大きく前進することになります。市全体に効果が及ぶ新たな拠点、にぎわいの場の創出に向けて、準備組合や関係企業、地域の皆さんと共に、まちづくりに取り組んでいきます。

土地区画整理組合設立に向けた今後の予定

時　期	内　容
令和２年３月	牧之原市ＩＣ北側土地区画整理準備組合　第３回総会
12月	県に土地区画整理事業の認可申請
令和３年３月	県による土地区画整理事業の認可
	（仮称）牧之原市ＩＣ北側土地区画整理組合の設立

意次の落日―失墜のはじまり―

将軍ひいては幕府のため、「律義」に財政再建に取り組んだ意次。成果は着実に積み重ねられ、田沼の改革は成功に終わるかに見えました。

事実、田沼時代の幕府財政を見ると、明和期に一時的な不調こそあるものの、宝暦期や安永期は全体的に好調で、特に金の収支は黒字を計上していました。ここから、田沼の改革は、着実に成果を出していたと考えられます。

ところが、意次の晩年に当たる天明期は、大幅な赤字に陥りました。なぜなら、日本史上に残る大災害が、意次政権を襲ったからです。

田沼時代の終わりを告げた歴史的大災害。それこそ、江戸時代最大の飢饉（ききん）とされる「天明の大飢饉」でした。被害を受けたのは、主に東北地方や関東地方の人々で、死者数は約13万人（当時の全国人口は約３千万人）といわれています。

元々東北地方は、天明期以前から天候不順や「やませ」による冷害に悩まされてきた地域でした。また、このころの東北諸藩の多くは、年貢増徴に加えて、災害用の備蓄米も売り払って財政再建を図ったため、農村部の疲弊が進んでいました。

こうした状況のなか、天明３（1783）年、東日本を冷夏・多雨という異常気象が襲って大凶作となります。東北地方の農村部は、これに対応できず、大飢饉へと発展しました。

しかし、事態はそれだけにとどまりませんでした。同年７月８日、浅間山（あさまやま）が大噴火し、大量の溶岩や火山灰を噴出しました。発生した火砕流は近隣の村々や河川を飲み込み、火山灰は関東一円に堆積して、作物の不良や水害を起こしました。凶作に続くこれらの災害によって、関東地方でも被害が拡大し、北関東を中心に飢饉となりました。

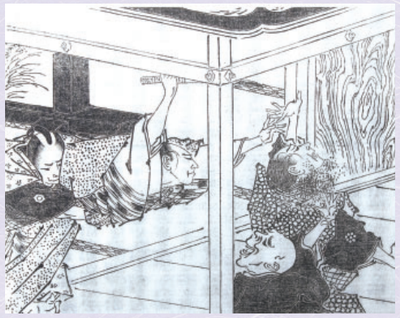
飢饉の影響は、都市部にも広がりました。米価をはじめとする物価の高騰です。これに対し、幕府は困窮者に米を支給したり、商人による米の買い占め、売り惜しみを禁止したりしましたが、効果は限定的でした。幕府財政も急激に悪化し、意次の責任を求める声が次第に強くなっていきました。

そして、天明４（1784）年３月24日、意次の今後を決定付けた大事件が起きました。次代を担う人材として期待していた意知（意次の嫡男）（おきとも）が、江戸城内にて、旗本の佐野善左衛門（さのぜんざえもん）政言（まさこと）によって斬り付けられ、非業の死を遂げてしまったのです。

事件後まもなく、佐野善左衛門は切腹を命じられましたが、後継ぎを失った意次政権のダメージは大きく、これを機に、田沼政治に対する不満や批判が爆発しました。

佐野善左衛門が事件を起こした理由は、良くわかっていませんが、主に３つの説が唱えられています。すなわち、▼佐野家の系図や旗をだまし取ったこと、賄賂を贈ったのに出世させてくれなかったことへの私怨（しえん）説▼田沼親子の政治で人々が苦しんでいることへの公憤説▼幕府の公式発表である乱心説―です。

「天明三年奥州地方大飢饉流民の図」（『凶荒図録』より）



「佐野善左衛門刃傷沙汰一件」（『田沼実記』挿絵より）